2023年 6月19日

　　　  **第19回（2023年度）日本シェリング協会研究奨励賞選考委員会報告**

 選考委員長 橋本　崇

**１．選考経過**

昨年度同様、選考の対象を「シェリングあるいは関連する同時代の思想、芸術、文学、宗教に、直接あるいは間接に関わる著書、博士学位論文、または複数の公刊論文」として、2023年３月末を期限に会員から候補者を募った結果、候補者として2名の推薦（自薦２名）の応募があった。

　まず、2名の候補者について、「シェリングあるいは関連する同時代の思想、芸術、文学、宗教に直接あるいは間接に関係するすぐれた研究成果を出しており、将来さらに独創的な研究者となると見込まれる、受賞年度の4月1日時点で45才以下もしくは常勤職にない日本シェリング協会会員」という条件に関して、４月中に第一次選考を行ったところ、２名とも既に常勤職にあるが、優れた研究活動を活発に展開していることから、第二次選考の対象者とすることになった。

　５月から６月にかけての第二次選考においては、文学分野の宮田委員、江口委員を中心に査読を行い、その査読結果を基に、委員会で審議した結果、全員一致で、小野寺氏と二藤氏に、第１９回研究奨励賞を授与することが決定された。

**２．受賞対象業績**

**＜小野寺賢一氏　大東文化大学外国語学部　准教授　４５歳＞**

**論文**

1. 「抽象的な作者をめぐるリュリコロギーと審級理論のあいだの論争について」

『ワセダ・ブレッター』第30号、2023年3月

2. 「抒情詩のジャンル史から考察する「詩人たちの時代」―ヘルダーリンにおける18世紀

模倣詩学の受容とハイデガーのゲオルゲ読解を中心に」

『詩人たちの時代の終わり？―ヘルダーリン、ツェラン、そしてバディウ』、日本独文学会研究叢書第146巻　2021年10月

3. 「マルガレーテ・ズースマン『近代ドイツ抒情詩の本質』（1910）にみられるヘーゲル

哲学の受容」

『シェリング年報』第29号、2021年10月

4. 「一回性と反復性―シュテファン・ゲオルゲ『魂の一年』」

『さまざまな一年―近現代ドイツ文学における暦の詩学』（松籟社）、2021年3月

5. 「抒情詩の〈私〉（Lyrisches Ich）」の成立とその受容―マルガレーテ・ズースマンか

らオスカー・ヴァルツェルへの変容を中心に」

『ドイツ文学』第162号、2021年3月

6. 「マルガレーテ・ズースマンの「抒情詩の私（das lyrische Ich）」概念におけるゲオルゲ

の影響」

『ワセダ・ブレッター』第27号、2020年2月

7. 「ヘルダーリンの頌歌『キロン』における固有名の機能」

『固有名の詩学』）法政大学出版局、2019年2月

**書評**

『ダンテ論―『神曲』と「個人」の出現』原基晶著

『世界文学』第135号、2022年7月

**＜二藤拓人氏 西南学院大学国際文化学部准教授　３２歳＞**

**著書**

１．『（フラグメント）を書く―フリードリヒ・シュレーゲルの文献学』

法政大学出版局 2022年9月

（ 博士学位申請論文（立教大学）『断片・断章（フラグメント）を書く―初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける書記の実践と思考の諸相―』（2019年3月）がもとになっている。）

**論文**

２． Wie ediert man die Athenäums-Fragmente? Eine Fallstudie　zur graphischen Dimension der Edition und Interpretation.

 In: Jahrbuch für　Internationale Germanistik: Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive.Akten des XIV. Kongresses der Internationalen Vereinigung für Germanistik, Bd. 8, 2022年12月

３．’Vernetzung‘ im Lesen. Zu einer Formalität und Medialität der　Fragmente bei Friedrich Schlegel.

 In: Tagungsband der «Asiatischen　Germanistentagung 2016 in Seoul». Hrsg. von Seong-Kyun Oh. Bd. 2, 2022年9月

４．Tradition und Innovation in der philologischen　Schreibtechnik Friedrich Schlegels.

 In: Study of the 19th Century Scholarship, vol.13, 2022年3月

５． 明星聖子, 二藤拓人, 森林駿介（2021）「「逮捕」と「終わり」をどう並べるか―カフカ『審判／訴訟』の編集・翻訳プロジェクト―」

『成城文藝』第257号、2021年12月

６． „Rhapsodisches“ Verfahren in der „Masse von Fragmenten“bei Friedrich Schlegel. Zur Theorie und Praxis der Schreibtechnik um 1800.

In:Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Hrsg. von Muroi, Yoshiyuki, 2020年12月

７．「〈流れる〉絵画芸術としての「断章集」―フリードリヒ・シュレーゲルにおける遊戯の文学的実践―」

日本アイヒェンドルフ協会会報『あうろ～ら』第37号、2020年4月

８．「1800年頃の文芸公共圏における断章の変遷―フリードリヒ・シュレーゲルを手掛かりにしたメディア文化史的考察―」

『ドイツ文学』第160号、2020年3月

９． Zäsur im Schreiben. Zur Materialität des handschriftlichen Fragments bei Friedrich Schlegel.

In: Zäsuren - Welt/Literatur. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. S. 90-108．2019年12月

10. Schreiben des Fragments. Zur Schreibart und Denkweise als Kulturpraxis beim frühen Fridrich Schlegel.

立教大学大学院ドイツ文学専攻論文集『WORT』第40号、2019年3月

11.「初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける〈断片・断章(フラグメント)〉の両面性―1800年頃の思想と文字メディア―」

日本アイヒェンドルフ協会会報『あうろ～ら』第35号、2018年4月

**３．受賞理由**

**＜小野寺賢一氏＞**

小野寺賢一氏の審査対象となった論文は計7本で、その内訳は、マーガレット・ズースマンによる「抒情詩の〈私〉」の概念を直接の主題とする論考が3本、その研究成果の延長でリュリコロギーを扱った論考が1本、他の研究者とのシンポジウム発表をもとに書かれた論考が3本となっている。どの論文の主題も小野寺氏の一貫した関心に基づいており、また、先行して書かれた論文における考察は後続の論文のうちに成果として着実に取り入れられているため、これらをまとめて一つの大きな研究と見て受賞対象とすることには十分な正当性があると考えられる**。**

小野寺氏の研究はドイツ文学を中心のフィールドとし、詩のジャンル論的考察や〈抽象的な作者〉をめぐる方法論的考察など、文芸学的な問題を主として論じている。しかし、ヘーゲル、ハイデガー、バディウなどを参照しつつ進められていくその叙述は、ドイツ文学研究に限定されない広がりを持ち、多分野の研究者にも興味深く受け止められるであろう、さまざまな論点を提示している。その意味からも、小野寺氏の業績は、シェリング協会研究奨励賞にふさわしいと考えられる。

**＜二藤拓人氏＞**

二藤拓人氏のこれまでの業績は、Fr.シュレーゲルの著作、とくに『アテネーウム』期までの著作に力点が置かれ、「断片・断章」という理念および叙述形式を中心的な対象としている。その研究は博士論文をもとに2022年に刊行された単著『断片・断章（フラグメント）を書く―フリードリヒ・シュレーゲルの文献学』（法政大学出版局）に結実した。

　初期ロマン主義において特に大きな意義を認められてきたこの形式に関しては、多くの研究の蓄積がある。二藤氏の研究の特徴は、そこに今世紀のドイツ語圏で精力的に進められている〈文化技術〉や〈書記現場〉についての研究をリンクさせ、推し進めている点にある。

　二藤氏は博士論文の成果を踏まえ、さらに研究領域を拡大、深化させており、ロマン主義研究において今後さらなる貢献が期待できる。また、この研究方向は、ドイツ文学という分野のみならず、シェリング協会で論じられる様々な分野にも大きな刺激を与えることが予想される。以上の点から、二藤氏はシェリング協会研究奨励賞にふさわしいと考えられる。

**４．各対象業績についての講評**

**＜小野寺賢一氏＞**

１．抽象的な作者をめぐるリュリコロギーと審級理論のあいだの論争について（『ワセダ・ブレッター』第30号、2023年3月）

本論考はまず、抒情詩研究におけるドイツでの最新の動向を、審級理論とリュリコロギーという二つの立場の成立過程、および両陣営の論争を中心として紹介する。さらに、二つの立場がそれぞれ提唱する「抽象的な作者」と「発信源」の概念、あるいはそれに類する他の概念を、ヘルダーリンとゲオルゲの詩の読解に実際に適用し、それにより各概念の有効性を検証している。シュミットを中心とした審級理論の研究者グループと、ツュムナーを中心とするリュリコロギーのグループとは、抒情詩において語る主体とは何かという探求のなかで形成されてきた。この形成過程を、20世紀の後半から現在にいたるまでの研究史を包括的かつ精緻に整理しながら示すこの論考は、「抒情詩の〈私〉」をめぐってこれまで小野寺氏が一貫した関心を持って研究を継続してきたからこそ成立したのだといえる。抒情詩の研究者のみならず、文学における作者や語り手といった問題に関心をもつ研究者すべてに有益な示唆をもたらす論考である。

２．抒情詩のジャンル史から考察する「詩人たちの時代」―ヘルダーリンにおける18世紀模倣詩学の受容とハイデガーのゲオルゲ読解を中心に（日本独文学会研究叢書第146巻『詩人たちの時代の終わり？―ヘルダーリン、ツェラン、そしてバディウ』、2021年10月2日）

本論校考では、バディウのいう「詩人たちの時代」の代表に、19世紀後半以降の詩人たちに混じってヘルダーリンが名を連ねる理由を、本論考は「近代抒情詩というジャンル的枠組みそのものに対する反省的な意識」においてヘルダーリンが時代を先取りしていたという点に求め、論じている。後半では、バディウが指摘する「哲学の詩への縫合」という事態をハイデガーにおけるゲオルゲ読解のうちに読み取りつつ、ハイデガーが実は当時の詩作における共通認識に強い影響を受けて哲学的思索を展開していたのではないかという問いを立て、これを丁寧に実証していく。前半では、ヘルダーリンの詩学を、バトゥーの美学との関わりを中心に明快に解きほぐしてゆく点が極めて示唆に富み、後半ではゲオルゲの詩の読解がハイデガーの思索の批判的検討につなげられる道筋が非常に説得力に富む。

３．マルガレーテ・ズースマン『近代ドイツ抒情詩の本質』（1910）にみられるヘーゲル哲学の受容（『シェリング年報』第29号、2021年10月）

これは、審査対象となった7本のうち、「抒情詩の〈私〉」の概念を直接の主題とするものとしては最新の論考である。当概念の提唱者であるマルガレーテ・ズースマンが、どのようにヘーゲル哲学を批判的に受容し、抒情詩に関する独自の理論を打ち立てていったのかを、本論考は精緻に跡づけている。「単独のもの」は「通約不可能」であり、これを受け入れる「象徴」として「抒情詩の〈私〉」を構想したところまではヘーゲルの影響下にあったズースマンは、さらに進んで、詩人という主体における内面性とのつながりを「抒情詩の〈私〉」において否定する。このように、「抒情詩の〈私〉」概念の成立過程を明るみに出したことが本論考の最大の功績だが、それだけではない。ヘーゲルとズースマンの相違を論ずることで両者の哲学的な思想の深部に光を当てることに成功しているという意味では、本論考は哲学を扱うものとも見ることができる。また、ヘルダーリンの詩に即した具体的な考察を織り交ぜることで、文学の論考としても高い水準のものとなっている。

**＜二藤拓人氏＞**

１．『（フラグメント）を書く―フリードリヒ・シュレーゲルの文献学』

法政大学出版局、2022年9月

〈書記現場〉・〈文化技術〉の研究は〈読むこと〉〈書くこと〉の実践が、当時のメディア環境やそれぞれの学問分野独自のディシプリンのなかで具体的にどのような形態をとり、思考や表現内容、そして表現形態にどのような影響を与えていたかを考察する。二藤氏の研究は、具体的には、若いころ、独学的ではあるが集中的に学んだ古典文献学における〈読むこと〉と〈書くこと〉の実践が初期シュレーゲルに与えた影響について考察するなかで、断片・断章が、1797年以前には、〈読まれ、取り扱われる〉対象としていわば受容的に考察されていたのに対し、1797年以後は、独自の執筆形式として、また特別な理念を帯びたものとして構想されていったというテーゼを打ち出す。

　〈断片・断章〉という形式が、反復的読書、資料の蒐集と整理、注釈、著述という当時の〈文化技術〉の実践の中で広く有するにいたった独自の意義を明らかにしつつ、シュレーゲルがその形式にあたえたさまざまな特徴と意味付けをこうした文脈の中に位置づけようとするこの研究は、従来のシュレーゲル研究の諸成果に新たな光を当てるものともなっている。古典文献学という一つのディシプリンに限定して論じるのではなく、そもそも「断章集」という形式が作品に独自の価値づけを付するものとして当時一種の流行であったという事実にも注目し、その上でシュレーゲルの独自性を古典文献学の実践との関連のなかで改めて考察するアプローチはその論述の説得力を増している。

　最新式の研究動向に依拠するにとどまらず、みずからシュレーゲルの手稿のファクシミリ版を検討するなかから新たな事実を提示しようとする努力は高く評価されるべきである。具体的には、『哲学修行時代』をはじめとするノート群における〈書記現場〉を分析する中で、引用し注記を付すこと、下線を引くこと、省略記号、定形的表現の多用などのもつ意義が詳細に論じられていく。それらの検討が、〈哲学における新たな対話性の模索〉や、〈生成の/するものとしての表現〉という詩学的構想、〈批評/批判における読むことと書くことの独自の連関についての考察と実践〉、といったこれまでシュレーゲルに関して繰り返し論じられてきた論点と結びつけられていくのはきわめて刺激的であり、自らの提示する仮説やテーゼの有する妥当性を慎重に検討しつつ進められる緻密な叙述も相まって、今後のフリードリヒ・シュレーゲルおよび初期ロマン主義研究においてながく参照されていく研究になるであろうと予想される。

２． Wie ediert man die Athenäums-Fragmente? Eine Fallstudie　zur graphischen Dimension der Edition und Interpretation.

 In: Jahrbuch für　Internationale Germanistik: Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive.Akten des XIV. Kongresses der Internationalen Vereinigung für Germanistik, Bd. 8, 2022年12月

この単著と同年に発表されたドイツ語論文 “Wie ediert man die Athenaeum-Fragmente” では、雑誌『アテネーウム』刊行にあたって、特に紙面のグラフィカルな処理に関してシュレーゲルが編集者としてどのような介入を行ったか、そしてシュレーゲル自身の〈断片・断章〉が後の編集者によってどのような処理を加えられて刊行されたかという二つの観点から〈編集〉を論じ、いくつもの興味深いテーゼを提示している。

７．「〈流れる〉絵画芸術としての「断章集」―フリードリヒ・シュレーゲルにおける遊戯の文学的実践―」

日本アイヒェンドルフ協会会報『あうろ～ら』第37号、2020年4月

　この論文では、絵画と叙事詩の比較という観点から断章集という形式をあらためて考察し、そのジャンル詩学を当時のドレスデン画廊の展示法と比較検討するという斬新な試みがなされている。